

「英文学」研究者としての漱石・夏目金之助

——明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論・2——

大本達也

政府と法が集団としての人間の安全、幸福に必要なものを与えているのに対して、学問、文学、芸術は、それほど専制的ではないが、おそらくはるかに強力なものであり、人間がつながれている鉄鎖を花飾りでおおい、人間がそのために生まれてきたと思われる根源的な自由の感情を抑圧し、奴隷状態を人間に好ませ、いわゆる洗練された国民なるものをつくりあげている。（ルソー：16）

序論 国民国家と《花飾り》

筆者は拙論「明治期における『文学』の形成過程をめぐる国民国家論」（2003）において、日本が「国民国家」として統合されていく中で、「文学」概念が形成されていった過程を考察した。これを「総論」とすると、本論はその「各論」にあたるものである。本論における引用文は《 》でくくり、出典は〔 〕で示した。また、漱石・夏目金之助（1867-1916、以下、漱石）の引用は『漱石全集』岩波書店（1994-1997）により、〔巻数：ページ数〕として記した。

さて、上に掲げたルソーの言葉を、西川長夫は《「集団としての人間」つまりは「国民」の物理的な安全や幸福に必要なものを与える機関や制度が「政府と法」であるとすれば、「学問、文芸、芸術」は精神的な支配の有力な手段を提供する》という意味に解釈している〔西川：30〕。現代日本において、《文芸、芸術》としての《文学》は、《学問》としての“discipline”を保証された制度でもある。中でも、漱石の小説は、国民国家・日本における代表的な“canon”＝《花飾り》であるだろう。それが本論において漱石を取り上げる理由である。

小説家として登場した当時から、漱石作品が“canon”であったわけではない。漱石が小説を書いた12年間には、全作品あわせて10万部程度しか売れていない、と漱石の娘・筆子の夫・松岡譲は推計している〔石原：22〕。けれども、漱石が亡くなった翌年の1917年から1923年までの6年間には、全作品の合計で54万部売れ、さらに2度刊行された全集が計17万部売れている〔石原：22〕。以後、売れ行きはさらに増え、1927年から1933年の7年間の岩波文庫における《類型売上部数の一位は『坊ちゃん』で約43万部、二位が『草枕』で約39万部、3位が『ここ

ろ』で約36万部と、上位3位までを漱石が独占』しているのである〔石原：25〕。漱石作品の“canon”化は、このような読者の広がりばかりでなく、大学における「文学」の“discipline”化の進行、そして、学校教材での漱石作品の採用などの諸要素が複雑にからまって進んだと考えられる。しかし、その考察は本論の取り扱う範囲ではない。職業的小説家として立つ1907年以前に「英文学」研究者として活動していた時期における、漱石の「文学」概念の形成過程を考察することが本論の目的である。

第1章 《英文学に欺かれたるが如き不安の念》

漱石は、1906年11月4日に『読売新聞』紙上に発表された『『文学論』序〕〔以下、「序」〕で、《春秋は十を連ねて吾前にあり、学ぶに余暇なしとは云はず、学んで徹せざるを恨みとするのみ、卒業せる余の脳裏には何となく英文学に欺かれたるが如き不安の念あり》と述べている〔14：8〕。後年、1914年の講演「私の個人主義」でも、《兎に角三年勉強して、遂に文学は解らずじまひだつたのです。私の煩悶は第一此所に根ざしてゐたと申し上げても差支えないでせう》と語っている〔16：591〕。卒業後、漱石は松山、熊本で英語教師をし、1900年から1903年にかけて英国に留学するのだが、この《英文学に欺かれたるが如き不安の念》はいつまで続いたのだろうか。

この講演で、《私は斯うした不安を抱いて大学を卒業し、同じ不安を連れて松山から熊本へ引越し、又同様の不安を胸の底に畳んで遂に外国迄渡つたのであります》と話しているように、《不安の念》は英国留学後も継続する〔16：592〕。けれども、「序」によると、留学から1年ほど経った頃、漱石は《根本的に文学とは如何なるものなるぞと云へる問題を解釈せんと決心》〔14：9〕し、ようやくその心境に変化が現れる。「私の個人主義」ではこう述べられている。

斯く私が啓発された時は、もう留学してから、一年以上経過してゐたのです。それでとても外国では私の事業を仕上る訳に行かない、兎に角出来る文材料を纏めて、本国へ立ち帰った後、立派に始末を付けやうといふ氣になりました。〔16：596〕

留学中の1900年に書かれた中根重一宛の書簡〔以下、中根書簡〕に《私も当地〔英国〕着後（去年八九月頃より）より一著述を思ひ立ち……》〔22：253〕とあることから、漱石が《不安の念》から抜け出したのは、1899年8、9月頃であると考えていいだろう。

では、なぜ漱石は「英文学」に《不安の念》を抱いていたのだろうか。「私の個人主義」では、《私は大学で英文学といふ専門をやりました。其英文学といふものは何んなものかと御尋ねになるかもしれませんが、それを三年専攻した私にも何が何だかまあ夢中だったので》〔16：591〕と言いつつ、こう述懐している。

其頃はヂクソンといふ人が教師でした。私は其先生の前で詩を読ませられたり文章を読ませられたり、作文を作つて、冠詞が落ちてゐると云つて叱られたり、発音が間違つてゐると怒られたりしました。試験にはウォーズワースは何年に生れて何年に死んだとか、シェイクスピアのフォリオは幾通りあるかとか、或はスコットの書いた作物を年代順に並べてみろとかいふ問題ばかり出たのです。年の若いあなた方にも略想像ができるでせう、果たしてこれが英文学か何うだかといふ事が、英文学はしばらく措いて第一文学とは何ういうものか、是では到底解る筈がありません。それなら自力でそれを窮め得るかと云ふと、まあ盲目の垣覗きといったやうなもので、図書館に入つて、何処をどううろついて手掛かりがないのです。是は自力の足りない許でなく其道に關した書物も乏しかつたのだらうと思ひます。〔16：591〕

羅列的な知識を問われるばかりで、いっこうに「英文学」の本質が見えてこないという不満がある。けれども、卒業後、多くの作品を読み、英国に留学し、研究を重ねるうちに、徐々に《不安の念》は払拭されてもおかしくない。なぜ、《不安の念》は留学後まで続いたのだろうか。それには、主に2つの要因が考えられる。ひとつは、英国における“discipline”としての「英文学」の不在であり、もうひとつは、日本における近代的「文学」概念の未確立である。まず、前者について考察する。

平川祐弘は、漱石は《どうやって文学を研究していいのかわからな》かったのだと指摘する〔日本：53〕。「序」によると、漱石は《オクスフォード、ケムブリッジは学問の府として遠く吾邦にも聞こえ》ているので、まず、知人を頼って、ケンブリッジに行った〔14：4〕。しかし、《費用の点に於て、時間の点に於て、又性格の点に於て》断念した〔14：5〕。そして、《オクスフォードはケムブリッジと異なる所なきを信じたれば行かず》に終わったと言う〔14：5〕。けれども、オックスブリッジを選択しなかった理由はそれだけではない。

漱石が《講義を聞こうと思つて講座を調べ》たところ、《オックスフォード、ケンブリッジ、それからエジンバラと、どこの大学でも英文学の講座がなかった》のだと渡部昇一は言う〔日本：27〕。《オックスフォードの詩学教授は、少なくとも19世紀いっぱいまでは、決して英詩を教えたことは》なく、《だいたいギリシア語の詩をラテン語で講義したりといったことをやって》いたのである〔日本：28〕。この点について、Robert Eaglestone は、こう指摘している。

In the nineteenth century, the closest thing to what we know as English—and it was still pretty distant—was the study of the classics. The classics were the ancient Greeks and Roman plays, poems and texts from which British society drew a great deal of inspiration. The study of these were crucial in making one an educated gentleman. [Eaglestone : 9–10]

ここでは、“discipline”としての「英文学」の意味で“English”という語が用いられているのだ

が、19世紀における英国では“the study of the classics”が“making one an educated gentleman”に不可欠であると考えられていた。つまり、渡部の言うように、《当時のイギリスでは、オックスフォードとかケンブリッジとかいう伝統的な大学で、英文学のごとき通俗的なものは教えない、というような感じだった》のであり、英語による小説は《自宅の暖炉の前で読めばいい》ものに過ぎなかったのである〔日本：27-28〕。Eaglestonも、“Most people thought that literature in English was at best an imitation of the classics and at worst only a mildly pleasant diversion”と指摘している〔Eaglestone：10〕。このように、漱石が留学した当時の英国では、“Academics considered the study of English literature—if it were to exist at all—should be for second-or third-rate minds”という状況だったのである〔Eaglestone：10〕。

さらに、“Literature”概念自体が、大きく変化したという事情もある。下記のように、“Literature”という語は元来、非常に広範な学問領域を含む言葉だった。

All this is made more complex by the fact that, historically, the category of texts known as ‘literature’ has changed a great deal. In fact, as Rob Pope argues in *The English Studies Book*, when the word was first used in the English language, from the late fourteenth century, it didn’t mean a type of text at all, but rather what we now call “literacy”, a sort of ‘knowledge of books’. In the nineteenth century, ‘literature’ did mean a body of writing, but included what we would call history, biography, philosophy, sociology, science and much more. It simply meant something written on a certain subject. [Eaglestone：48]

留学中の1901年の書簡には、結局、ロンドンに留まり、傍聴生として《University College へ行つて英文学の講義を聞》くことにしたとある〔22：217〕。漱石は聴講した講義の時間割をメモに残している〔19：40〕。それによると、《15世紀英文学史》のほか、“Lecture on History of English Literature, 1340-1400 ; Old English”, “Introduction to the Study of Old English”, “General Lecture and the History of English Literature”, “History of English Literature 1800-1837”, “Introduction to Germanic Philology”といった講義を聴講している〔19：434〕。古英語や中英語の講義のほか、19世紀前半の近代「英文学」の講義も開講されていたのは、この大学が、19世紀に《オックスフォードおよびケンブリッジ両大学が供給できない、あるいは供給しようとする純粋な需要に応えようとして誕生した》市民大学だったためである〔グリーン：117〕。

けれども、漱石はすぐに大学へ通うのはやめてしまう。その理由について、先の書簡では《第一時の配合が悪い無暗に待たせられる恐れがある講義其物は多少面白い節もあるが日本の大学の講義とさして変わった事もない汽車へ乗つて時間を損して聴に行くよりも其費用で本を買つて読む方が早道だといふ気になる》〔22：217〕と述べられている。確かに、漱石が大学をやめた理由はいくつかあるだろう。けれども、制度としての「英文学」の不在、すなわち「英文学」という“discipline”が確立されていなかったことが大きく影響していたと考えられる。

そしてこの、「英文学」の不在こそが、《英文学に欺かれたるが如き不安の念》の要因のひとつだったのである。

第2章 《漢学に所謂文学と英語に所謂文学》

《不安の念》の第2の要因に、当時の日本における近代的な意味での「文学」概念の未確立ということがある。漱石はノートにこう記している。

- 余ハ英文学ヲ年来研究ス、余ハ英文学ノ趣味ヲ解セズ
- 之ヲ解スルニ下ノ原因ノ一カ又ハ一以上ナラザル可ラズ
 - (1) 余ハ趣味ナキ人ナリ
 - (2) 余ハ英文学ヲ読ミ能ハズ (趣味ヲ有スルモ)
 - (3) 余ハ英文学ヲ読ミ理解シ能フモ之ニ伴フ感情ヲ有セズ
 - (4) 東西ノ趣味全ク異ナリ [21:371]

「序」で漱石は、《余が英語に於ける知識は無論深しと云ふ可からざるも、漢籍に於けるそれに劣れりとは思わず》[14:8]と言っている。それゆえ、このメモは《英文学ノ趣味ヲ解》することができない理由が、《東西ノ趣味全ク異》なるためであることを再認識しようとする意図で書かれたものであったと考えられる。

また「序」では《余は少時好んで漢籍を学びたり。之を学ぶ事短きにも関わらず、文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり》とも言っている[14:7]。長山靖生は、《左国史漢、すなわち『春秋左氏伝』『国語』『史記』『漢書』といった中国の史書は、我が国においても平安以来、文章家の必読書とされてきたが、その内容は近代的な用語としての文学に属するものではなく、あくまで歴史書であり、儒学的な治者のための思想書であった》[長山:38]と指摘している。漱石は、徳川期の支配理念である儒学に連なる漢文で書かれた諸作品を通じて、《文学》概念を形成していったのである。

これは漱石に限ったことではない。拙論「明治期における『文学』の形成過程をめぐる国民国家論」ですでに論じてたように、明治初中期においては、近代的な《文学》概念は確立していなかった。左国史漢的《文学》概念から、《英文学も亦かくの如きものなるべし》と思い込んだ漱石は、《生涯を挙げて之を学ぶも、あながちに悔ゆることなかるべし》と「英文学」の道へ進み[14:7]、《不安の念》に苦しむことになった。「序」の「草稿」にはこう書かれている。

之〔英文学〕ヲ修ムルノ始メ文学トハ如何ナル者ナルカヲ知ラズ只漢文漢詩ノ如キ者ト思ヘリ。漢文漢詩若クハ日本ノ文学書ヨリ得タル茫漠タル文学テフ觀念ハ何レ国ノ文学何レ

ノ時ノ文学ニモ応用スベシト思ヘリ漸ク書ヲ読ムニ從ヒ英文英詩ナル者ノ吾ガ予期セル
趣味トハイタク異ナルヲ発見シ、又其異ナル点ニ於テ毫モ趣味ヲ解セザルニ気が付タリ。
〔26：77〕

留学当時の英国において、「英文学」が“discipline”として確立されていなかったとはいえ、英語で書かれた詩や小説に関する書物はいくつも出版されていた。漱石はロンドンの下宿でそういう書物をひも解いていった。その結果、作品そのものだけでなく、作品に対する評価も、自身の《趣味》とは大きく異なっていることに漱石はとまどう。1910年の「鑑賞の統一と独立」で漱石はこう回想している。

往年余が英国に留学して、文学といふ茫漠たるものを研究してゐる際に、作物の評価上、大に彼此の差に迷つて困却したことがある、例へば向うの人が悉く許して傑作と見做してゐるものが、此方には左程に思はれなかつたり、或ひは微妙の音楽があるとして強ひられる詩歌に、何物をも迎へ入れる耳がなかつたり、そんな矛盾が毎日の様にあるので、不愉快な日ばかり重ねていた。〔16：329〕

《英文英詩》と《漢文漢詩若クハ日本ノ文学書》における《趣味》の相違に戸惑う漱石は、《好悪のかく迄に岐かるゝは両者の性質のそれ程に異なるが為めならずんばあらず、還元すれば漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざる可からず》〔14：8〕と結論する。英国留学1年を経て、漱石はようやく、「左国史漢」的《文学》と英国における“Literature”が全く別の概念であることに気がついたのである。

明治以前からの《文学》概念の影響下に育った漱石にとって、《好》は「漢学」であり、《悪》は「英文学」であった。1905-1906年のメモに、《英人の文学は安慰を与ふるの文学にあらず刺激を与ふるの文学なり。人の塵慮を一掃するの文学にあらずして益人を俗了するの文学なり》とあるように〔19：205〕、帰国して東大で「英文学」を講義している時期にも、漱石は《趣味》の相違を意識していた。江藤淳はこう指摘している。

小説などというものは稗史小説と言ひまして、昔の表現を用いれば「婦女子の慰みもの」であった。そういう、つまり東アジアの漢字文化圏の伝統を漱石が背負っていたという事実、これはまず事実として認められると思います。〔日本：55-56〕

とりわけ、《英文学の内容》が《恋愛でもって99パーセントが占められている》ことに《ちょっと驚いて違和感を感じた》〔日本：52〕のではないかと平川は指摘する。渡部も、《男女の間のことなどをゴチャゴチャやるのはそう高級でない」と漱石は思っていた》のだと述べる〔日本：48〕。《英文学といっても99%が男と女が別れたのくつついたのというような話で、しかもそれについて論文を書けなんて言われたら、いったいどう思う》だろうかと言うのである〔日本：

54). 確かに、漱石自身も、1907年に発行された『文学論』の「文学的内容の基本成分」の章でこう書いている。

偕て此情緒〔恋〕が文学的内容として用ゐらるゝ分量は実に驚くべき程にして、古今の文学、ことに西洋文学の九分は何れも争ふて此種の内容を含むと云ふも不可なきが如し。就中小説、戯曲の類にありては此分子なしに存在すること殆ど不可能と云ひ得べし。〔14:78〕

そして、この《恋》の取り使いの違いこそが、《東西両洋思想の一大相違》〔14:84〕であると述べる。

吾人は恋愛を重大視すると同時に之を常に踏みつけんとす、踏みつけ得ざれば己れの受けたる教育に対し面目なしと云ふ感あり。意馬心猿の欲するまゝに従へば、必ず罪惡の感随伴し来るべし。これ誠に東西両洋思想の一大相違と云ふて可なり。西洋人は恋を神聖と見立て、之に耽るを得意とする傾向を有すること前諸例によりても明なるべく、また如此く重きを置かれたる此情緒を囿纏せる文学の多きも勢免るべからざるなり。〔14:84〕

漱石はさらに踏み込んで、《然して此基本情緒が果たして文学的内容たり得べきや否やに関しては、何人も其答を要せざるべけれど、これには社会維持の政策上許し難き部分あることを忘るべからず》と言う〔14:77〕。そういった観点から、John Keats (1795-1821) の詩 *Endymion* (1818) を論じてこう断じる。

文学もこゝに至りて多少の危険を伴ふに至るなり。真面目にかくの如き感情を世に吹き込むものあらば、そは世を毒する分子と云はざるべからず、文学亡国論の唱へらるゝは故なきにあらず。凡そ吾々東洋人の心底に蟠まる根本思想を剔抉して之を暴露するとせよ。教育なき者はいざ知らず、前代の訓育の潮流に接せざる現下の少年はいざ知らず、尋常の世の人心には恋に遠慮なく耽ることの快なるを感ずると共に、此快感は一種の罪なりとの觀念附随し来つことは免れ難き現象なるべし。〔14:84〕

《社会維持の政策上許し難き》とか《世を毒する分子》などの激しい言葉には、漱石の不快感の強さが表れている。

漱石の感じる《趣味》の相違は《恋》の問題だけではなく枚挙にいとまがないが、漱石はこういった「英文学」に対する《趣味》の違いをどう克服しようとしたのだろうか。1905年の「戦後文学の趨勢」で、漱石は《どの位西洋に感服しても、これを国民に紹介するに当つては日本人としての特性を忘れてはならぬので、これを判断するのもその通り日本人としての特性を忘れてはならぬ》と述べている〔25:110〕。漱石は、《趣味》の相違という問題を、《日本人としての特性》を尊重することで解決しようとした。この立場は後年も変わらず、「私の個人主義」ではこう述べられている。

西洋人が是は立派な詩だとか、口調が大変好いとか云つても、それは其西洋人の見る所で、私の参考にならん事はないにしても、私にさう思へなければ、到底受売をすべき筈のものではないのです。私が独立した一個の日本人であつて、決して英国人の奴婢でない以上はこれ位の見識は国民の一員として具へてゐなければならぬ上に、世界に共通な正直といふ徳義を重んずる点から見ても、私は私の意見を曲げてはならないのです。〔16：594〕

「英文学」研究において《其本場の批評家のいふ所と私の考と矛盾しては何うも普通の場合気が引ける事になる》が、《たとひ此矛盾を融和する事が不可能にしても、それを説明する事は出来る筈》であり、《さうして単に其説明文でも日本の文壇には一道の光明を投げ与へる事が出来る》だろう、と漱石は考えたのである〔16：594-595〕。

第3章 「文学論」

以上、考察してきたように、英国における“discipline”としての「英文学」の不在と、日本における近代的「文学」概念の不在が、漱石に《何となく英文学に欺かれたるが如き不安の念》を生じさせた要因であったが、「文学論」執筆を決意することで、漱石の《不安》に変化が現れる。以下、「文学論」構想における漱石の《文学》概念を検討する。

ロンドンの下宿で、漱石は《文学とは何んなものであるか、その概念を根本的に自力で作上げるより外に、私を救ふ途はないのだと悟つた》と言う〔16：593〕。そして、こう決意する。

余は下宿に立て籠もりたり。一切の文学書を行李の底に取めたり。文学書を読んで文学の如何なるものなるかを知らんとするは血を以て血を洗うが如き手段たるを信じたればなり。余は心理的に文学は如何なる必要あつて、此世に生れ、発達し、頽廢するかを極めんと誓へり。余は社会的に文学は如何なる必要あつて、存在し、隆興し、衰滅するかを究めんと誓へり。〔14：9〕

漱石は《文学とは如何なるもの》かを《解釈》する決意をすることで、「英文学」に対する《不安は全く消え》たと述べる〔16：596〕。以後、下宿にたてこもり、書物を読むという日々を送る。5、6ヶ月後には《何となくある正体のある様に感ぜられる程にな》つたと言う〔14：9-10〕。そして、その成果を《帰朝後十年を期して、充分なる研鑽の結果を大成し、然る後世に問う心得》〔14：9-10〕を漱石は抱く。中根書簡でも《然し問題が如何にも大問題故わるとすると流れるかと存候よし首尾よく出来上り候とも二年や三年ではとても成就仕る間敷かと存候》と言っている〔22：253-254〕。

ところが、《帰朝するや否や》《突然講師として東京大学にて英文学を講ずべき依頼を受け》ることになる〔14：10〕。漱石は、《今日文学を研究する学生に取つては、余が文学論を紹介す

るの、尤も興味多く、且つ時機に適せるを感じた〔14：10〕。そして、1903年9月から1938年6月にかけての「英文学概説」で、「文学論」を講じるのである〔14：539〕。漱石は、その講義を教え子の中川芳太郎がまとめたものに朱を入れ、最後の3分の1を新たに書き加え、1907年に『文学論』として出版する〔14：539〕。本来《十年の計画も二年につゞめたる為》、そして《文学学生の所期に応ぜんとして、本来の組織を変じたる為め》、出版された『文学論』は《今に至つて未完成品にして、又未完成品なるを免れず》と漱石は弁明している〔14：12〕。

よく知られているように、漱石は、『文学論』において、《F + f》という公式をもって文学の原理を示そうとした。1906年に漱石はこう述べている。

文学の大勢がこれから何のやうに向ふであらうかといったって、仲々わかるものではない。観測といふことを過去の経験によつてやるなら、まづ心理学や社会学なども調べてから研究した上で文学史が立派な一個の科学と成立した暁でなければなりません。〔25：169-170〕

当時、《すべての学問を自然科学的に解明するというのが時代の風潮、19世紀の趨勢》だった、と江藤は言う〔日本：44〕。とりわけ、進化論は、《儒学の枠組が崩壊し始めた直後の日本に入ってきた、いちばん包括的な思想体系だった》のである〔日本：56〕。実際、漱石のメモには、たとえば“Art must be subservient to object of self-preservation and preservation of race.”〔21：171〕などと、進化論的用語が散見される。「序」の《社会的に文学は如何なる必要あつて、存在し、隆興し、衰滅するかを究めん》という文の中の、《「隆興し、衰滅する」という言い回し》は《社会進化論者の常套句だった》と長山は指摘する〔長山：54〕。当時の英国では、Herbert Spencer (1820-1903) の提唱する社会進化論が隆盛を極めており、漱石もその影響を大きく受けている。このことは、留学中の「文学論」原案を見ればよくわかる。漱石は中根書簡でこう述べている。

先づ小生の考にては「世界を如何に観るべきやと云ふ論より始め夫より人生を如何に解釈すべきやの問題に移り夫より人生の意義目的及び其活力の変化を論じ次に開化の如何なる者なるやを論じ開化を構造する諸原素を解剖し其聯合して発展する方向よりして文芸の開化に及す影響及其何物なるかを論ず」る積りに候斯様な大き事故哲学にも歴史にも政治にも心理にも生物学にも進化論にも関係致候故自分ながら其大胆なるにあきれ候事も有之候へども思ひ立候事故行く処迄行く積に候》〔22：254〕

《進化論は当時の知識階級に、体系化された文明開化の理論として滔々として入って》きたのであつて、《英文学を学ぶ意義づけもその上になされたし、日本がなぜ近代化しなければならぬかという意義づけもその上になされた》と江藤は言う〔日本：56〕。『文学論』において、漱石は《文学》 = “Literature” の社会進化論的必然性を証明しようとした。「英文学」を通して、日本の「開化」における“Literature”の必要性を説くことこそが『文学論』の主眼だった

のである。

この点について、「文学論」の原案メモで詳しく検討してみよう。

- (1) 世界ヲ如何ニ観ルベキ
- (2) 人生ト世界トノ関係如何. 人生ハ世界ト関係ナキカ. 関係アルカ. 関係アラバ其関係如何
- (3) 世界ト人世トノ見解ヨリ人生ノ目的ヲ論ズ
- (4) 吾人人類ノ目的ハ皆同一ナルカ. 人類ト他ノ動物トノ目的ハ皆同一ナルカ
- (5) 同一ナラバ衝突ヲ免カレザルカ. 衝突ヲ免カレズンバ如何ナル状況ニ於イテ又如何ナル時期ニ於イテ如何ナル方法ヲ以テ此調和ヲハカルカ
- (6) 現在ノ世ハ此調和ヲ得ツ、アルカ
- (7) 調和ヲ得ズトスレバ吾人ノ目的ハ此調和ニ近ズク為ニ其方向ニ進歩セザル可カラズ
- (8) 日本人民ハ人類ノ一国代表者トシテ此調和ニ近ズク為ニ其方向ニ進歩セザル可カラズ
- (9) 其調和ノ方法如何. 其進歩ノ方向如何. 未来ノ調和ヲ得ン為ニ一時ノ不調和ヲ来スコトアルベキカ. 之ヲ犠牲ニ供スベキカ
- (10) 此方法ヲ称シテ開化ト云ヒ其方向ヲ名ツケテ進化ト云フ
- (11) 文芸トハ如何ナルモノゾ
 文芸ノ基源
 文芸ノ発達及其法則
 文芸ト時代トノ関係 etc.
- (11) 文芸ハ開化ニ如何ナル関係アルカ進化ニ如何ナル関係アルカ
- (12) 若シ此方法ト方向ニ抵触セバ全ク文芸ヲ廃スベシ
- (13) 若文芸ノ一部分ガ此ニ無関係ニテ一部分ガ有益ニ一部分ガ有害ナラバ第三ヲ除芟スベシ
- (14) 文芸ノ開化ヲ裨益スベキ範圍
- (15) 日本目下ノ状況ニ於テ日本ノ進路ヲ助クベキ文芸ハ如何ナル者ナラザル可ラザルカ. V. 西洋
- (16) 文芸家ノ資格及其決心 [21 : 701-702]

原案では、まず、《世界》《人類》《人生》の《関係》が論じられ、次にそれらの《目的》、《調和》の《方向》への《進歩》の必要性が述べられる。次に、《調和》の方法が《開化》であり、《開化》への《方向》が《進化》であることが論じられる。そして、《文芸》と《開化》《進化》の関係が検証され、最後に、どのような《文芸》が《開化》に役立つのか、《日本の進路を助けるのか》が考察される予定だったのである。

『文学論』出版前の1905年に《自体我日本は不幸にして、文学の方面に於ては昔から外国に向て誇り得る——誇るに足るべき文学はないと思ふ》と漱石は述べている [25 : 109]。《徳川

時代に漢文が盛んであつた、然し当時は支那が標準であつた、縦令傑作があつたといつてもそれも特殊なのは無い、支那人と同じやうなのか、若くばそれ以下で決してそれ以上に出るといふことは出来なかつた、今の文学界も亦たこんな様がある》と言うのである〔25：112〕。このように、漱石には《日本ノ進路ヲ助クベキ文芸》はいまだ存在しないという認識があつた。

その一方で、《日本ハ西洋ニ圧逼セラレツ、アル日本ノ領土ハ幸安全ナレドモ領土以内ノ物即チ国ヲ構成スル分子ハ日々此圧逼ヲ受ケテ領分ヲ減ジツ、アル》〔21：106〕と漱石は危機感をあらわにしたメモを残している。そして、こう書いている。

何〔処〕迄圧逼ニ甘ズルカ若シ之ニ甘ズレバ日本ハ悉ク西洋化セン西洋化スルモ可ナリ西洋化スルニ及バザルニ化セパイラヌカヲ費ヤスナリ有益ニ用ベキカヲ損スルナリ。他ノ事ハイザ知ラズ文芸ノ事ニ於イテハ余ハ余ガ日本人トシテノ立脚地ヨリ此圧逼ニ反抗セントス。〔21：106〕

ここで漱石は、《文芸》＝《文学》の西洋化と徹底的に戦う姿勢をしめしている。漱石にとって、《日本人としての特性》を有した“Literature”の登場こそが西洋の《圧逼ニ反抗》するための必須要件だったのである。

結論 文学・国家・戦争

後年、「私の個人主義」で漱石はこう述べている。

色々の事情で、私は私の企てた事業を途中で中止してしまひました。私の著はした文学論はその記念といふよりも寧ろ失敗の亡骸です。然も畸形児の亡骸です。或は立派に建設されないうちに地震で倒された未成市街の廢墟のやうなものです。〕〔16：596〕

これは職業的小説家としての述懐であるけれども、出版当事から、漱石が『文学論』の《失敗》を認識していたのは疑いない。それは、「英文学」研究をもって、《日本の文壇には一道の光明を投げ与へる事が出来る》〔16：595〕と考えた漱石の行き詰まりであつた。東大を去り、小説専任として朝日新聞社に入ったのは、『文学論』出版とほぼ同時期であつた。

長山は言う。

漢学と英学。それは金之助にとって、それぞれ自分の本来の嗜好と将来への志望を象徴するものだった。この場合の「志望」とは単に自信の栄達ばかりでなく、有用の人となることで、自己存在を確認したいという無意識の願望が根底にあつてのものだったろう。金之助は、有用の人として義務を果たさなければ、親からも存在意義を認めてもらえないような子供として、自分を感じていたのである。〔長山：40-41〕

長山の指摘どおり、漱石はその育ち上がりからして、《有用の人》すなわち国家の役に立つことを強く意識せざるを得なかった。一高・東大と当時のエリートコースを進むうち、その意識は義務となっていった。進路として選んだ「英文学」で《有用の人》とならねばならない。けれども「英文学」は見えてこない。その焦燥が《英文学に欺かれたるが如き不安の念》を生み出していく。『文学論』に取り組むことで、《不安の念》からは免れることはできたが、できたものは《失敗の亡骸》であった。そして、漱石は「英文学」研究をやめ、《英語に所謂文学》の概念に基づく小説の創作に専心していくのである。1910年、漱石は朝日新聞「文芸欄」にこう書いている。

余が現在の頭を支配し余が将来の仕事に影響するものは残念ながら、わが祖国のもたらした過去ではなくつて、却て異人種の海の向ふから持つて来てくれた思想である。〔16:307〕

1905年、「戦後文界の趨勢」で漱石は、日露戦争の勝利を目前にして、《兎に角日本は今日に於いては連戦連捷——平和克復後に於いても千古空前の大戦勝国の名誉を荷ひ得る事は争うべからずだ》〔25:108〕として、こう宣言する。

今日から自信自覚の地位に起つた国民は、吾々は国民として全世界の何所までも通用する、我邦の過去には文学としては大なる成功を為したものはないが、これからは成功する、これからは大傑作が製作される、決して西洋に劣けは取らぬ、西洋のに比較され得るもの、イヤそれ以上のものを出さねばならぬ、出すことも出来得るといふ——気概が出て来る、これが反響として国民に自覚され自信される事になるのは自然の勢ひである、でこの趨勢から生れて来る日本の文学は今までとは違つて頗る有望なものになつて来るであろう。〔25:113-114〕

西川は、《近代文学は初めから戦争と無縁ではありえない》と明言する〔西川:35〕。それは《もし国家が戦争のための装置であり、《文学がその国家の一つの制度であるならば、文学も文学者も初めから、すでに常に戦争にまきこまれている》からだ、と言う〔西川:35-36〕。そして、《近代の戦争》は《国民国家の本質が最も明瞭に表現される時期》であり、《文学の制度としての意味が最も露わに示される時期ではないか》と指摘している〔西川:36〕。漱石が、戦勝の《趨勢から生まれて来た》《今までとは違つて頗る有望な》《日本の文学》＝《花飾り》を生み出したのであるなら、その下にはまぎれもなく《人間がつながれている鉄鎖》がおおい隠されている。

引用文献

- ・石原千秋 (2004) 『漱石と3人の読者』講談社
- ・Eagleton, Robert (2002) *Doing English: A Guide for Literature Students* (2nd ed.) London and New York: Routledge [邦訳: ロバート=イーグルストン (2003) 川口喬一訳 『英文学とは何か——新しい知の構築のために』研究社]
- ・グリーン, ヴィヴィアン=H. H. (1994) 安原義仁・成定薫訳 『イギリスの大学—その歴史と生態』法政大学出版局
- ・長山靖生 (1999) 『鷗外のおカルト, 漱石の科学』新潮社
- ・西川長夫 (1995) 『地球時代の民族=文化理論——脱「国民文化」のために』新曜社
- ・日本比較文学会編 (1977) 『漱石における東と西』主婦の友社
- ・ルソー (1978) 「学問芸術論」山路昭訳 『ルソー全集4』白水社

(Japanese Literature in 19–20th Centuries, 国民国家と文学)